

家庭

夜明けとともに働き始める＝カンボジアで



プリンさん(41)の運転する2人乗りのバイクは、薄暗いモリス大通りを郊外に向かって急ぐ。後部座席の私は、冷たい空気にブルッと身を震わせた。日中は汗ばむ南の国カンボジアだが、12月初旬の夜明け前は、さすがに寒い。

真っ暗な道での運転には慣れていないプリンさんも時々、道路の穴ぼこにハンドルを取られる。寝ぼけまなこの私は、その度にバイクから振り落とされそうになり、ハッとする。そうやって約20分、スタメンチャイに着いた。

バイクを降りて、底の厚い長靴に履き替える。まだ人影は見あたらない。大型のごみ収集車やブルドーザ



働く人の横顔を朝日が照らす

宇田 有三

ーが走り回る昼間の光景がうそのような静けさだ。

2匹のブタが鼻を鳴らしながらうろついていた。カメラに一脚を

取り付ける。シャッターの金属音が虫の音のように響く。蚊帳を張って寝ている人がいた。邪魔しないように、できるだけ静かに歩き回る。

6時前、東の空が明るくなってきた。薄墨色だった風景に変化が出てくる。約10分の間、空一面が青く染まる。どこからともなく人が現れ、大きな袋を背に担いで仕事を始めた。すぐにオレンジ色の太陽が昇ってきた。人びとの横顔が、朝日を浴びて輝く。

「ビューティフル!」。思わず、隣で働いていたおばさんに話しかけた。おばさんは、ごみを拾う手を止め、私と並んで夜が明けていくのを眺めていた。

ここを生活の場として生まれ育った子どもたちは、たとえプノンペンを離れることがあっても、「私の故郷は美しかった」と自慢するのだろうか。

(フォトジャーナリスト)